HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	博物館展示におけるコミュニケーション構造の変化について ： 都道府県立歴史博物館を対象に
Author(s)	魏, 雯君
Citation	研究論集, 23, 163（左）-186（左）
Issue Date	2024-01-25
DOI	https://doi.org/10.14943/rjgshhs.23.l163
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/91089
Type	departmental bulletin paper
File Information	10_rjgshhs_23_p163-186_l.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

10.14943/rjgshhs.23.l 163

博物館展示における コミュニケーション構造の変化について

── 都道府県立歴史博物館を対象に ──

魏　　雯　君

要　旨

本稿では，都道府県立歴史博物館の展示におけるコミュニケーション構造の変化を明らかにするため，博物館が展示利用者との関係をどのように認識してきたか，利用者の主体性を促すためにどのような展示手法を導入したきたかを考察した。研究方法は，これまで常設展示を全面改修した都道府県立歴史博物館を取り上げ，文献調査を通じて展示改修前後の変化を比較することである。調査の結果，地域の歴史・文化を理解させるための手段として展示を認識する傾向が続いているが，利用者と交流する場や利用者が主体的に活動する場として再構築しようとする動きが見られた。また，利用者の生活に関連した展示内容の増加，多層的な情報を提供する展示の増加，自由に選択できる動線を使用する展示の増加などの変化から，利用者が主体的で多様的な意識を持つ存在という認識が深まってきたと考えられる。しかし，実物資料を中心とする展示のような，利用者の主体性を促すことに効果があると考えられている展示については，その具体的な効果に関する調査研究が不足していることがわかった。そのほか，選択できる動線を使用した展示において，動線が利用者の展示体験に支障をきたしたことが明らかになった。それは，利用者の主体性がまだ十分に重要視され研究されていない可能性を示唆していると考えられる。

1．はじめに

1.1　都道府県立歴史博物館の常設展示の転換

都道府県立博物館の常設展示は，かつて一方的で固定的な印象が強く，展示担当者と展示利用者の関係性におけるイデオロギー性がしばしば批判されてきた。例えば，伊藤寿朗は，一過

性の見学施設である「第二世代博物館」の典型例として県立博物館を挙げながら，1990 年代当時の展示は近代合理主義の影響で展示利用者を普遍的な科学知識の啓蒙対象として客体化する「中央志向型博物館」の性格を持つものが多いと指摘したことがある[1]（伊藤寿朗　1986：240-266）。近年，公共施設の経営改革と博物館学習理論の進展に伴い，展示利用者との交流，展示利用者の主体性を重視する姿勢が博物館界に広がっている。それについて，吉田憲司は，2000 年前後から始まった展示リニューアルに際して，固定した歴史表象を一方的に生み出す場所であった県立歴史博物館において観覧者の自身の理解や地域の歴史と自身の関係を見つめ直す場へ転換する試みが図られるようになっているという見解を示している（吉田憲司　2011：224-238）。

吉田は，歴史と記憶についての議論をまとめた上で，歴史とは過去の出来事に関する集団の中で構成され共有された物語であり，記憶とは個人が想起し意味付与をしたものであると区別し，1970 年代前後に明治百年記念を機に建設された県立歴史博物館は構成され共有された歴史を語る場であったと考えられている。具体的には，県立歴史博物館には鎌倉・室町・江戸といった時代区分に沿って地域の歴史を通時的に表現する通史型展示が多く，その内容は地域社会の動きを中央における権力の推移に整合的な形で説明するもので，その目的は県という枠のもとで同じ歴史を共有する者を育成していくものであり，価値観の多様性を認めようとする現在において再検討する必要があると述べている。さらに，観覧者の参加，観覧者の個人の記憶の想起を展示に取り組むことで，多様な歴史像を創出しようとする実践が日本の博物館において行われており，2000 年前後から始まった県立歴史博物館の展示リニューアルにあたっても，観覧者自身の主体的な歴史の理解や，観覧者が自ら住む地域の歴史と自身の関係を見つめ直すような展示が追求されるようになってきたと考えられている（吉田憲司　2011：224-238）。

吉田によれば，地域の歴史を構成し共有しようとしてきた県立歴史博物館においてはより深くて多様的な理解を創出する場所への転換が図られており，その転換を進めさせたのは展示利用者の個人的な記憶を促す展示と考えられる。ここの転換を言い換えれば，展示におけるコミュニケーション構造の変化とも言えよう。すなわち，個人的な誤解や偏見であっても，啓蒙の客体であった展示利用者の主体的な理解が認められ，展示担当者と展示そのものに影響を与えるようになったということである。展示利用者の主体性が認められることは，展示情報の伝達効果を高めるために来館者の展示理解度を確認することとは本質的な違いがあると考えられ

---

[1] 伊藤寿朗は，博物館を時系列の縦座標で三世代に分けており，第一世代は希少価値を持つ資料の保存を運営の軸とする博物館，第二世代は多様な価値を持つ資料の公開を運営の軸とする博物館，第三世代は市民の参加・体験を運営の軸とする博物館と定義している。同時に，博物館を活動目的という横座標により，利用者からのフードバックを求めない観光利用を目的とする観光志向型，全国・全県単位などで科学的知識・成果の普及を目的とする中央志向型，地域の課題を博物館の機能を通して応えていくことを目的とする地域志向型に分類している（伊藤　1986）。

る。

一方，都道府県立博物館の常設展示の変化について，情報伝達手法の進展の視点から考察したものや，歴史学自身の変化が博物館展示に与えた影響を検討した研究がこれまで行われてきた。例えば，高橋裕は，日本国内で 50〜60 館の展示製作に関わった経験を通じて，日本の歴史展示の変遷を整理し，情景再構成展示や展劇，パッケージ展示など，近年新たに現れた展示手法の特徴をまとめ，現在歴史博物館の役割における 10 の方向性[2] を述べている（高橋　2004）。同様に，増田亜樹らは公立歴史博物館の常設展示に関する調査を通じて，展示の構成の仕方によって 7 つの類型[3] に分類し，それぞれの類型が時代の変化とともに増減する傾向を検討した（増田・碓田・谷　2011）。一方，湯浅隆は 20 世紀後半における歴史学の動向がどのように歴史展示を規定してきたかを分析し，1990 年代以降のアカデミズム歴史学の絶対視がなされなくなったことで，博物館が自身の特性を主張する環境が整ったと指摘し，歴史展示に好転の兆しが現れているという結論を出している（湯浅　2018）。

これらの研究はほとんど大型の公立歴史博物館の常設展示を対象としており，その研究結果が都道府県立歴史博物館の展示内容と展示手法の変化を反映していると言える。しかし，吉田が考えている展示利用者の主体的な理解を促せる場への転換，あるいは展示におけるコミュニケーション構造の変化に関する考察には至っていなかった。特に，利用者の主体的な理解を促すために導入した展示手法に対して，利用者側がどのように受け入れているかについては深く取り上げられていなかった。展示リニューアルの方向性や効果を検証するための来館者調査は各博物館で行われているが，その結果を展示におけるコミュニケーション構造の変化の角度で総合的に論じるものは見当たらなかった。したがって，吉田が考えている転換を検証し，その効果と課題を考察する必要があると考えられる。

1.2　展示におけるコミュニケーション構造の特徴と問題点

展示におけるコミュニケーションの構造について，橋下裕之はフィーバーグリーンヒルが提唱したインターラクティブ・コミュニケーションモデル理論と民俗学のパラダイムを劇的に変化させたパフォーマンス・アプローチに基づき，展示のコミュニケーションが演劇における物を介したインターラクティブ・ミスコミュニケーションに類似した構造を持っていると論じ，展示担当者は資料を通して展示利用者の記憶を触発し，利用者の自分なりの解釈に機会を提供すべきであると提案した（橋本　1990）。

---

[2] 歴史展示の役割における 10 つの方向性とは，教育，地域，生活，現在，環境，体感，創造，娯楽，情報，快適である（高橋　2004：7-8）。

[3] 歴史展示構成の 7 つの類型とは，分野展示型，通史展示型，主題展示型，通史・分野展示型，通史・主題展示型，主題・分野展示型，通史・分野・主題型である（増田・碓田・谷　2011）。

橋本は，従来の展示担当者のメッセージが物を介して展示利用者に伝えるという一方的なコミュニケーションモデルを，利用者を能動的な主体として取り扱うことで双方向的なコミュニケーションモデルに転換させたというフィーバーグリーンヒルの理論に対して，そのアプローチの有効性を認めながら，それはある種の理想的な到達点であると考えている。彼は，国立歴史民俗博物館で担当した企画展示における来館者間の会話と，同僚である篠原徹が行った民俗展示の来館者に関する調査結果[4] から，人々が常に物の真贋や機能，使い方のような「即物的な関心」を持ち，展示資料を自分の生活に結び付けて自分なりに解釈していくことを確認した。そのことから，展示担当者のメッセージを展示利用者に伝えるという従来の展示についての発想自体を再検討する必要があると自省した。だが，橋本は利用者が偏見や誤解で展示意図を解釈することが無意味ではなく，結果としてある種のコミュニケーションを生み出したとも考え，演劇におけるコミュニケーション構造を参照し「インターラクティブ・ミスコミュニケーション」という概念を提唱している。さらに，ここで重要なのは担当者と利用者の双方向のコミュニケーションを合致させることよりも，物を通して利用者の記憶を触発し，利用者が個人的に解釈する機会を提供すべきであると述べている。そのほか，橋本は従来重視されていなかった利用者の間のコミュニケーションの重要性も言及した。それも展示利用者が展示を個人化する過程の一部であり，担当者とのコミュニケーションと同等に重要であると指摘している（橋本 1990）。

つまり，橋本は従来の展示コミュニケーションに疑問を抱き，資料を通して展示利用者に情報を伝えるという構造を見直す必要性を示している。彼はフィーバーグリーンヒルが提唱している双方向的なコミュニケーションモデルを認めながら，担当者の意図と利用者の解釈が一致しないほうが一般的であるという現実から，資料を通して利用者の記憶を触発し，利用者の個人的な解釈の機会を提供することの意義を強調している。橋本のように，従来の展示の一方的なコミュニケーション構造に疑問を持つ論説は他にも存在している。

伊藤は，1990 年代の展示が解説文を中心に見たり答えを求めたりするような「受身の学習スタイル」に対応したものであると考えている。そのような展示では，いかにわかりやすい展示手法や展示解説を使っていても設定された選択肢以外に判断の余地がなく，強制的な展示ストーリーの中から「自ら発見し構想してみるという達成感や充実感がうまれず，再度訪ねる意欲も湧いてこない」と指摘している。また，受身の学習スタイルに対応した展示から，市民の自己教育力を育成する展示への変化に求められるものとして，比較可能な膨大な資料の蓄積を

[4] 篠原徹は 1988 年に国立歴史民俗博物館の民俗展示において，来館者の会話を収集し分析することにより，来館者が①人は自らの体験領域に対象を引き込んで対象を常民的に歪曲して理解する，②人は真贋について極めて関心がある，③人はおよそ民俗学者の解説には無関心であるの 3 つの一般則を出した（橋本　1990：547）。

展示するという古典的な「オカス型展示」を挙げている。さらに，その変化における博物館の役割は，市民の自己教育を育成するための場の整備と，学習内容と方法を援助することにあると述べている（伊藤　1990：16-19）。

伊藤が提示した「オカス型展示」は，戦前の博物館によくあるような，資料を展示ケースに閉じ込めてラベルのみで基礎情報を提供するものではなく，個々の展示資料に焦点を当て，利用者が興味・関心にあったものを選べる展示方法を指すと考えられる。

旧埼玉県立博物館（現埼玉県立歴史と民俗の博物館）で 20 年にわたり展示業務を担当した学芸員の村上義彦は，1990 年代前後の都道府県立博物館の常設展示において，通史展示が最も普遍的な展示手法であるが，割に成功していなかったと評価している。村上が述べている通史展示とは，目的地方の歴史を原始古代から近現代までにストーリー化し，展示シナリオを作成し，それにあらかじめ選定しておいた資料を当てはめるものである。彼はその通史展示の失敗要因として，言葉を伝達媒体として学問体系を形成してきた歴史学的な情報を，実物資料の配列で観覧者に理解させることが困難であることを指摘している。そして，抽象情報の具体化を中心とする歴史展示方法論の確立が必要と主張し，将来的には解説文などの言葉の補助に頼らずに実物資料のみによる展示が望ましいと論じている（村上　1992：7-24；63-68）。

小島道裕は，特定の歴史像を押さないことを常設展示の前提とした国立歴史民俗博物館について，その常設展示の問題点を論じたことがある。国立歴史民俗博物館は，特定の歴史像を一方的に展示利用者に押すことの危険性を認識した上で，特定の歴史観になりやすい政治史を避け，展示解説を積極的に行わない方針を取った。しかし，小島は，生活史に関連するテーマを選択すること自体が特定の歴史解釈に沿った結果であり，解説の少なかった展示が理解し難いものとなってしまったと指摘した。そこで，彼が考案した対策は，展示意図を明確にすること，歴史資料の元に帰ること，観客の展示理解を支援することの 3 つである。展示意図を明確にする理由は，歴史展示とは歴史資料の多様な意味から一つの意味において展示するものであるため，その意味を選んだ意図とほかの見方もあることを観客に明確に説明しないと特定の歴史像を押し付ける展示になってしまうからである。歴史資料の元に帰るとは，資料から意味を汲み取るという研究過程を展示することが大切ということである。観客の展示理解を支援することとは，ハードの展示を学びのリソースとして捉え，教育プログラムなどのソフト面の活動を通じて観客の展示理解能力を「トレーニング」していくことである（小島　2003：110-133）。

以上のように，1990 年代前後において，歴史資料を使って歴史情報を展示利用者に伝えるという従来の都道府県立博物館の歴史展示におけるコミュニケーション構造の問題点が多くの人に指摘されてきた。さらに，先述の 4 人とも，実物資料に帰り，実物資料を通して利用者の主体的な理解を促す展示の価値を強調している。橋本は，担当者の意図と利用者の解釈が一致しない現実から，担当者と利用者の双方的なコミュニケーションを調合させるよりも，展示資料を通して利用者の記憶を触発する機会を提供することに意義があると述べている。伊藤は，一

方的に答えを教える展示では利用者が自ら発見することが難しいと指摘し，選択可能な大量な資料と，資料を学び方法を提供する展示が求められると考えられている。村上は，実物資料が抽象的な歴史知識を伝えるのに相応しくないことが，都道府県立博物館の常設展示が成功していなかった要因と考え，解説文などよりも実物資料を中心とした展示を望んでいる。小島は特定の歴史像を展示利用者に押さないことを前提とした国立歴史民俗博物館の事例から，展示意図を明確すること，資料の元に帰ること，展示利用者の理解を支援することの重要性を論じている。特に，展示を実物資料の多様的な意味を理解するための「トレニングセンター」として活用する考え方を提示している。

1.3　研究目的，研究方法と調査対象

1.3.1　研究目的と研究方法

以上のように，1990 年代前後の歴史展示におけるコミュニケーション構造の特徴と課題に関する研究をまとめた。ここで問題となっているのは，1990 年代以降の都道府県立博物館において，展示コミュニケーション構造がどのように変化してきたかのことと考えられる。すなわち，吉田が提示した転換の実現度の検証である。さらに，利用者の主体的な理解を促すことに重要視されている実物資料を中心とした展示について，実際導入されているか，その新たな効果と課題についても確認しなければならない。

したがって，本稿ではまず，博物館側が展示利用者との関係をどのように捉えてきたか，展示利用者の主体性を促すためにどのような展示手法を導入してきたかを調査し，その変化を考察していく。ここで，展示改修を切り口とし，これまで全面改修を実施した都道府県立博物館を取り上げ，改修前後の変化を比較することで，その変化の傾向をまとめる。比較に際して，利用者に対する考え方が読み取れる展示目的，展示内容，展示空間，展示方法を比較の項目にする。展示空間とは，展示室の動線計画や展示コーナーの空間配置のことを指す。論文や歴史小説，歴史映画などの歴史叙述と違い，展示は建築と空間に頼るものであるため，展示空間の変化も考察の範囲に入れる。展示方法においては，展示のコミュニケーション構造の問題解決に有意義なアプローチと考えられている実物資料を中心とした展示に特に注目する。

調査方法は文献調査を採用する。具体的には，博物館が刊行する報告書や年報，所属学芸員が発表する学術論文などの文献資料を対象に，展示リニューアルの改修方針，改修内容，改修効果に関した情報を収集する。

1.3.2　調査対象

調査対象となる博物館の選出方法について，『全国博物館総覧』に登録している博物館園から以下に記載する 2 点に従って抽出した。具体的な調査対象館は表 1 にまとめている。

①　『全国博物館総覧』（日本博物館協会　2020）に登録している博物館園のうち，館種が「総

合」・「郷土」・「歴史」に属し，加えて設立主体が「都立」・「道立」・「府立」・「県立」に分類される館を抽出する。本稿は都道府県立博物館を調査対象とするが，所在地方の過去の

表 1　調査対象館と文献資料

調査対象[5]	常設展示室改修状況	使用文献資料
山形県立博物館	1971 年 4 月開館 1980 年 7 月リニューアル・オープン	山形県立博物館業務課　1984「展示改装整備事業報告」山形県立博物館『山形県立博物館研究報告　第 5 号』pp. 1-52
福井県立歴史博物館	1984 年開館 2003 年リニューアル・オープン	①笠松雅弘　2000「新しい地域博物館をめざして～歴史博物館へのリニューアル構想～」福井県立博物館『ふくいミュージアム』no.38，pp2-4 ②瓜生由起　2003「福井県立博物館のリニューアル～福井県立博物館から福井県立歴史博物館～」日本博物館協会『博物館研究』38(7)，pp.8-9
秋田県立博物館	1975 年 5 月開館 2004 年 4 月リニューアル・オープン	①佐々木朝登　1976「展示・その計画を中心として（秋田県立博物館特集）」日本博物館協会『博物館研究』11(5)，pp.6-42 ②佐々田亨三　2005「リニューアル・オープンに際して」秋田県立博物館『秋田県立博物館研究報告』(30)，pp.1-4 ③阿部裕紀子・船木信一・渡部均　2005「リニューアルに伴う展示構成　Ⅰ．自然展示室」秋田県立博物館『秋田県立博物館研究報告』(30)，pp.5-18 ④庄内昭男・高橋正・糸田和樹　2005「リニューアルに伴う展示構成　Ⅱ．人文展示室」秋田県立博物館『秋田県立博物館研究報告』(30)，pp.19-36 ⑤船木信一・鈴木秀一　2005「リニューアルに伴う展示構成　Ⅳ．わくわくたんけん室」秋田県立博物館『秋田県立博物館研究報告』(30)，pp.47-56
埼玉県立歴史と民俗の博物館	1971 年 11 月埼玉県立博物館開館 1983 年 11 月埼玉県立博物館リニューアル・オープン 2007 年 4 月埼玉県立民俗文化センターとの統合によって埼玉県立歴史と民俗の博物館と改称，リニューアル・オープン	①二階堂実・西口由子・井上かおり　2008「常設展示改修事業および「ゆめ・体験ひろば」設置事業の記録」埼玉県立歴史と民俗の博物館『埼玉県立歴史と民俗の博物館紀要第 2 号』pp.1-36 ②井上かおり　2019「近現代展示室の現状と課題 ── リニューアル 10 年後の検討にかえて ──」埼玉県立歴史と民俗の博物館『埼玉県立歴史と民俗の博物館紀要第 13 号』pp.46-56
兵庫県立歴史博物館	1983 年 4 月開館 1996 年 3 月リニューアル・オープン	①兵庫県立歴史博物館　1992『兵庫県立歴史博物館紀要　塵界　第 5 号』 ②小栗栖健治　1996「兵庫県立歴史博物館におけるリニューアルの理念と実践」日本博物館協会『博物館研究』31(7)，pp.4-10
	2007 年 4 月リニューアル・オープン	①神戸佳文　2009「兵庫県立歴史博物館のリニューアルについて」神戸史学会『歴史と神戸』48(2)，pp.13-22 ②兵庫県立歴史博物館　2010『兵庫県立歴史博物館館報　平成 19 年度・平成 20 年度』

[5] 調査対象館の並び順は，最後にリニューアルオープンした年に基づいて時間順になっている。

沖縄県立博物館・美術館	1966 年沖縄民政府立首里博物館移転開館 1972 年日本復帰に伴い，沖縄県立博物館と改称 2007 年沖縄県立美術館との併設によって沖縄県立博物館・美術館と改称，リニューアル・オープン	①園原謙　2008「博物館づくり ── 沖縄県立博物館新館常設展示の場合 ──」縄県立博物館・美術館『沖縄県立博物館・美術館紀要　第 1 号別刷』pp.59–79 ②濱口寿夫　2010「博物館常設展示における入場者の観覧行動」沖縄県立博物館・美術館博物館編『沖縄県立博物館・美術館博物館紀要』vol.3，pp.101–110 ③濱口寿夫　2011「博物館常設展示における展示項目は入場者に見られているか？」沖縄県立博物館・美術館博物館編『沖縄県立博物館・美術館博物館紀要』vol.4，pp.101–114 ④沖縄県立博物館・美術館　2018『沖縄県立博物館・美術館年報　No.11』
高知県立歴史民俗資料館	1991 年開館 2010 年リニューアル・オープン	高知県立歴史民俗資料館　2010「改修工事」高知県立歴史民俗資料館『高知県立歴史民俗資料館年報　平成 21 年度』pp.85–96
三重県総合博物館	1953 年三重県立博物館開館 2014 年三重県総合博物館と改称，リニューアル・オープン	①三重県　2008『新県立博物館基本計画』 ②天野秀昭　2011「三重の新県立博物館整備について ── ともに考え，活動し，成長する博物館をめざして」日本博物館協会『博物館研究』46(3)，pp.24–27 ③三重県総合博物館　2016『三重県総合博物館年報通巻 1 号　2014』
北海道博物館	1971 年 4 月北海道開拓記念館開館 1992 年 4 月北海道開拓記念館リニューアル・オープン	北海道開拓記念館　1994『北海道開拓記念館常設展示改訂事業報告』
	2015 年 4 月北海道立アイヌ民族文化研究センターとの統合によって北海道博物館と改称，リニューアル・オープン	①北海道　2010『北海道博物館基本計画』 ②堀繁久　2014「北海道博物館，2015 年春オープン！」日本博物館協会『博物館研究』49(9)，pp.25–28 ③栗原憲一・池田貴夫・堀繁久　2018「来館者調査からみる北海道博物館の総合展示室およびはっけん広場の現状と課題」北海道博物館編『北海道博物館研究紀要』vol.3，pp.201–218 ④栗原憲一・田村雅史　2017「博物館活動報告　2016 年度博物館実習において実施した来場者調査について」北海道博物館編『北海道博物館研究紀要』vol.2，pp.121–132
石川県立歴史博物館	1986 年開館 2015 年リニューアル・オープン	石川県立歴史博物館　2017「歴史博物館リニューアル基本構想」石川県立歴史博物館『石川県立歴史博物館年報第 17 号　平成 25・26 年度版』pp.43–60
群馬県立歴史博物館	1979 年 10 月開館 2016 年 7 月リニューアル・オープン	①黒田日出男・岡部清・小池浩平・簗瀬太輔・中山剛志 2014「群馬県立歴史博物館改修工事に関する取り組み ── 使命書の策定と展示の基本方針 ──」群馬県立歴史博物館『群馬県立歴史博物館紀要』pp.1–73 ②小池浩平　2017「群馬県立歴史博物館改修工事に関する取り組み 3 ── 展示リニューアルとその課題 ──」群馬県立歴史博物館『群馬県立歴史博物館紀要　第 38 号』pp.59–90

出来事を常設展示のテーマとした都道府県立博物館には自然史を展示する自然史博物館と，人類の歴史をテーマとする歴史博物館あるいは郷土博物館が存在し，さらに，自然・人文の多岐にわたる資料を総合的に取り扱って展示を行う総合博物館も含まれている。ボリュームを配慮した上で，考古・歴史・民俗資料を取り扱う博物館を調査対象に絞る。また，考古・歴史・民俗資料を取り扱う博物館には特定の歴史時期・研究分野・歴史事件および人物・遺跡を取り扱う博物館に分けることができる。この 2 つの類型の都道府県立博物館は展示規模から展示内容までの差異が大きくなりすぎるため，調査対象を前者に絞った。

② ①の結果をふまえ，さらに『全国博物館総覧』の「沿革・概要」項目を参照し，開館から 2020 年 4 月時点までに常設展示の全面改修を実施したことのある館に絞り込みを行う。2020 年以降，新型コロナウイルス感染症の拡大により，体験型展示を一時中止したり，事業をオンラインミュージアムに移行したりする博物館が見られた。また，常設展示のリニューアル計画を変更した博物館もある。その影響で，展示の利用状況には博物館が想定しなかった急激な変化が生じている可能性が高いことから，本稿ではまず新型コロナウイルス感染症が発生するまでの状況を把握することを目標とし，2020 年 4 月までに展示リニューアルを実施した博物館を調査対象とした。新型コロナウイルス感染症以降の変化については，本研究のこれからの課題とする。ただし，博物館が公開している刊行物および論文において展示改修についての記述が確認できない館は除外した。

また，調査で用いた文献資料の収集方法は下記の通りである。収集した文献資料のリストは表 1 を参照されたい。

① 調査対象館が公開している刊行物の中，展示改修の経緯と改修後の来館者調査に関するもの集める。

② 学術雑誌『博物館研究』，『博物館学雑誌』，『日本ミュージアム・マネージメント学会研究紀要』及び『展示学』から，2023 年度までの調査対象館に関する論文を集めた。国立情報学研究所が運営する学術論文や図書・雑誌などの学術情報データベース CiNii を用いて 2023 年 8 月までの文献検索を行った。検索キーワードは各調査対象館名を用いた。

2．都道府県立博物館の常設展示の変化と問題点

2.1 都道府県立博物館の常設展示の変化についての調査結果

本節では，山形県立博物館，福井県立歴史博物館，秋田県立博物館，埼玉県立歴史と民俗の博物館，兵庫県立歴史博物館，沖縄県立博物館，高知県立歴史民俗資料館，三重県総合博物館，北海道博物館，石川県立歴史博物館，群馬県立歴史博物館の 11 館の 13 回の展示リニューアルを対象とし，展示改修前後の変化を展示目的，展示内容と展示空間，展示手法の項目別でまと

める[6]。

2.1.1　展示目的の変化

展示目的の変化について，以上各館の改修目的・改修方針に関した記述をまとめると，地域の歴史･文化を理解させるための手段として展示を認識する傾向が続いていることがわかった。その一方で，2000 年以降，展示を利用者と交流する場，利用者が主体的に活動する場として再構築しようとする博物館も見られた。

2000 年代に入ってから，展示改修方針において「交流」というキーワードが頻繁に見られるようになり，利用者との交流を重視しようとする姿勢が顕著になってきた。ただし，都道府県立博物館における交流の意味は一致しておらず，各館ごとにに様々な視点で捉えられている。例えば，秋田県立博物館は，「交流できる博物館」を一つの改修方針とし，その具体的な内容について「見る・触れる・聞く・考える・参加すること通じて共に学びあえる施設」と述べている（佐々田　2005：2)。要するに，利用者が展示に参加することを交流としている。また，福井県立歴史博物館および北海道博物館第 2 回の展示改修は館内の解説員や職員との対話を含む交流を重視する方針を取り，特に北海道博物館は職員と来館者が常に交流できる「交流ゾーン」を常設展示室に設けている（瓜生　2003：9，堀　2014：26)。そのほか，兵庫県立博物館第 2 回の展示改修では，「交流博物館」という理想像が明確に掲げられ，その実現を目指して全館改修が行われた（神戸　2009)。兵庫県立博物館は交流を「機能，活動，人材などのすべてが既存の枠を超えて交流しあう」と定義し，展示を交流が生まれる場所として考え直し，同館 1 階に来館者同士が自由に交流や学習ができる「学びのスペース」を設置した（神戸　2009)。

展示利用者の展示コミュニケーションにおける位置付けについても，近年では利用者を展示活動の主体とする博物館が現れた。本稿の調査対象となる 11 館のうち，三重県総合博物館は，従来の地域の歴史・文化を伝達するための展示を県民・利用者が主体的に交流し活動するための場として再構築しようとしている（三重県　2008：37，天野　2011)。こうした目的を達成するための主要な取り組みとして，地域の歴史･文化を概観する通史展示の面積を縮小しながら，利用者が自由に交流し学べる活動空間と，県内の個人や団体が企画する展示を行う「交流展示室」を新に設けた（三重県　2008：37)。また，新館整備段階から開館後の展示更新まで，すべての展示活動に利用者が参画できるツールを提供する工夫を行っている（三重県総合博物館 2016：29-33)。そのほか，北海道博物館は 1990 年代にすでに展示における情報伝達が一方的なものであると認識し，ジオラマや模型，シンボル展示[7] が利用者の学習の動機付けに有効な手

---

[6] 各館の改修経過と改修内容の詳細については，筆者の研究論文Ⅰ「博物館歴史展示における来館者に対する意識の変化について ── 都道府県立歴史系博物館を対象に ──」にまとめている。

[7] シンボル展示とは，北海道開拓記念館常設展示室の入り口に設置していた復元展示で，開拓原野における伐木・開墾の状況を再現したものである（北海道開拓記念館　1994：62)。

法であると考えていた（北海道開拓記念館　1994：55；62）。第 2 回の展示改修においても，双方向性のある情報伝達を改修目標の一つとし，五感を活用した参加型展示物への期待を言及した（堀　2014：26）。

2.1.2　展示内容と展示空間の変化

1990 年代からの展示内容と展示空間の変化傾向は，①政治史・経済史を中心とした展示から民衆史・生活史に関する展示へと変化，②地域と博物館の特色が表現できる展示内容の増加，③多層的な展示内容の増加，④選択できる展示動線の増加の 4 点にまとめることができる。

(1) 民衆史・日常生活に関する展示内容の増加

元は政治史・経済史を中心に据えていた展示を，民衆史や戦後の生活史を中心とした展示，または現代生活に関わる展示へと改修した博物館として，山形県立博物館，秋田県立博物館，兵庫県歴史博物館第 1 回の展示改修，高知県立民俗資料館，北海道博物館第 1 回の展示改修，群馬県立歴史博物館において確認できた。歴史展示における民衆史や生活史が高まった背景について，① 1970 年代以降の歴史学研究の進展を展示に反映すべきとする意見が強まったこと，②民衆史や生活史をテーマとする展示が館蔵資料をより活用できる可能性が意識されるようになったこと，③民衆史や生活史をテーマとする展示がより利用者に展示内容を考えさせる効果が意識されるようになったことがあるとされている。その一方で，秋田県立博物館のように，各時代の政治経済の情勢が人々の暮らしにいかなる影響を与えたのかという捉え方の中に暮らしの展示を置く必要があると認識し，庶民がどのように情勢変化に向き合ったのか，そして人々が自己実現のためにいかなる動きをしたのかに着目した博物館もある（庄内・高橋・糸田 2005：19）。

民衆史・日常生活に関する展示内容についての考え方を具体的に述べる博物館として，まず，山形県立博物館は新展示の「展示視点」を述べる際，①学問的に体系づけられた知識を教えるのではなく，県民生活を考える素材としての自然や歴史，②県民が直接体験できる日常生活に関連する身近な問題，③県民のために何を触発し，何を感じさせ，何を考えさせようとするのか明確にした内容など，県民の日常生活と関連のある内容を展示すべきという考え方を示した（山形県立博物館業務課　1984：8-9）。

また，兵庫県立歴史博物館は，「兵庫県の歩みというよりも全国史の縮小版としてのイメージが強い」旧展示に対して，歴史上の著名な人物の肖像画などの複製を減らし，館蔵品や県内に伝わる資料を活用することを通して，「兵庫の歴史の担い手となった庶民のくらしぶりを軸に，政治体制や社会体制の変化が庶民生活にいかに影響を及ぼしたのかという実像を浮き彫りにしようとする」新展示に改修した（兵庫県立歴史博物館　1992，小栗栖　1996：8）。民衆史を核にする必要性について，歴史研究と発掘調査の進展によって人々の生活の具体相が明らかにされ，一般の人々にも生活に結びついた視点から歴史に対する新たな関心が生まれることから，

庶民生活の実像をできるだけ具体的に示すべきとする姿勢が博物館の展示の主流となりつつあると述べている（小栗栖　1996：7）。

次に，高知県立歴史民俗資料館は，改修前の総合展示が実物資料とレプリカ，写真パネルによるオーソドックスな教科書的通史展示であったため，深い学習やインパクトに欠けていたと考えていた（高知県立歴史民俗資料館　2010：88）。改修にあたって，政治史中心の展示から庶民の歴史に焦点を絞った展示に変え，長宗我部氏に関するテーマ展示を常設展示に新たに導入した。それと同時に，中世のコーナーでは歴史・考古資料による宗教史・社会経済史をメインとし，近世から近現代までのコーナーでは産業史・流通史の視点を組み入れた（高知県立歴史民俗資料館　2010：85–96）。特に，旧展示が第二次世界大戦時点までで終わっていたため，「現代を生きる人々にとって歴史への接点が少ない点」への反省から，現代の暮らしについての展示を導入した（高知県立歴史民俗資料館　2010：87）。

そして，群馬県立歴史博物館は，1970 年代以降の歴史学研究において戦後の政治・経済を中心としたオーソドックスな研究から，環境史・生活史・社会史・交流史に関する研究に移行する潮流がおこったため，博物館の展示もその進展に合わせ，最新の研究成果を取り入れるべきだと考えていた。それにより，以前の政治・経済史を中心に据えたテーマを，自然と人との関わりや人びとのくらし，地域間交流などに視点をおいたテーマに変更した（黒田ほか　2014：14–15）。

(2) 地域と博物館の特色が表現できる展示内容の増加

地域性や博物館の特色が表現できる展示内容を増やす傾向が見られた改修例として，秋田県立博物館，埼玉県立歴史と民俗の博物館，兵庫県歴史博物館第 2 回展示，三重県総合博物館，北海道博物館の 2 回の展示改修，群馬県立歴史博物館がある。特に，埼玉県立歴史と民俗の博物館と群馬県立歴史博物館はその取り組みについて述べている。埼玉県立歴史と民俗の博物館の展示改修では，近現代展示室では埼玉の産業・人物を学ぶコーナーが新設し，民俗展示室では展示資料を「地域性」というキーワードによって「山のくらし」，「里のくらし」，「都市のくらし」の 3 つの展示ゾーンに分けた（二階堂・西口・井上　2008：5–12）。群馬県立歴史博物館は，従来の通史展示は主題が平易で総花的であり，伝えたいメッセージが明確でなかったとの指摘を受け，群馬県の特色をアピールするために通史展示の最初に東国古墳文化展示を採用している（黒田ほか　2014：15–18）。

(3) 多層的な展示情報を提供する博物館の増加

利用者に多層的な展示情報を提供する博物館として，まず，山形県立博物館は新展示の対象について述べる際，①対象によって必要な情報が選択できるように展示内容を構成すること，②小中学生が理解できることを原則とすること，③内容によって専門的な研究と学術的な研究にも役立つようにすることの 3 つの考え方を示した（山形県立博物館業務課　1984：8）。石川県立歴史博物館は利用者の多様なニーズに対応するため，簡単な解説から詳細な解説まで，選

択できる展示情報を解説の機器に導入している（石川県立歴史博物館　2017：46）。北海道博物館第１回の展示改修と沖縄県立博物では，調査のために訪れる研究者など目的意識を持った利用者の学習ニーズに対応するため，専門性の高い「分類展示」を導入した（北海道開拓記念館 1994，園原　2008）。三重県総合博物館は改修にあたって，体験展示や交流展示など，利用者の異なるニーズに対応できる多様な展示を新設した（三重県総合博物館　2016）。

特に，学校団体への配慮を重視することが普遍的になってきた。埼玉県立歴史と民俗の博物館は，学校団体による利用に対応するため，見沼代用水と通船掘に関する展示を１クラス単位で観覧できるような広い広場に移設した（二階堂・西口・井上　2008：12）。群馬県立歴史博物館は，小中学校の学習指導要領や教科書等の内容を展示に取り入れている（黒田ほか　2014：14）。山形県立博物館は，解説パネルの文章をメインコピーとサブコピーに分け，メインコピーにはテーマの概要を理解できる文章を，サブコピーにはより深い理解をサポートする詳細な図表や写真を掲載している（山形県立博物館業務課　1984：21）。

(4) 選択できる展示動線を採用する博物館の増加

従来主流であった単一で強制的な展示動線を選択できる動線に変化した例として，秋田県立博物館，兵庫県歴史博物館の第１回展示改修，北海道博物館の第２回展示改修，沖縄県立博物館があった。その中でも，秋田県立博物館は，旧人文展示室の全体像がわかりにくく，出口までの順路がわからないなどの来館者の意見を受け，「オープンでフレキシブルなスペース」を新展示の特徴とし，強制的であった旧動線をフリー動線に変えた（庄内・高橋・糸田　2005：19）。ただし，リニューアル・オープン後にフリー動線に惑う観覧者が若干見られたことから，より細やかな対応が求められると考えている（庄内・高橋・糸田　2005：19）。兵庫県立歴史博物館は第１回の展示改修において，自由な立場での学習を重視し，個性豊かな博物館を創造するという考え方に基づき，旧展示の一方通行の単一動線から，観覧者が自由な意思で選択できる動線へ改修した（兵庫県歴史博物館　1992）。

2.1.3　展示手法の変化

展示手法の変化について，ほとんどの調査対象館がフレキシブルな展示を改修目標の一つとした。実物資料の展示に関しては，模型や映像などを多用する館も少なくないが，全体的に実物資料を展示の中心に据える傾向が見られた。

(1) フレキシブルな展示を重視する傾向

「フレキシブルな展示」という概念は，1990 年代以降の展示改修において頻繁に言及されるようになった。本稿の調査対象となるほとんどの博物館は，固定化を常設展示が解決すべき大きな課題と捉え，常設展示に可変性を持たせるように工夫した。その課題を対処するため，①更新しやすい展示資料や展示装置を使用すること，②展示テーマや展示シナリオを更新しやすいように設定すること，③定期的に更新できる展示室を新設することの３つが確認できた。

更新しやすい展示資料や展示装置の具体例として，秋田県立博物館は改修に際して，「オープンでフレキシブルなスペース」の展示を目指し，期間限定の公開や新発見資料のタイムリー公開に対応できる展示ケースを導入し，解説パネルの取り外しが可能な展示装置を設置した（庄内・高橋・糸田　2005：19）。同様に，高知県立歴史民俗資料館も，移動できない大型模型が中心となった旧常設展示について，観覧者から常に同じ展示で新味がないという指摘を受けたため，フレキシブルな展示を改修の目標とし，一部の模型を撤去し，移動可能な展示台を導入した（高知県立歴史民俗資料館　2010：85）。

更新しやすい展示テーマや展示シナリオについては，埼玉県立歴史と民俗の博物館は，埼玉の通史に徹底的に拘った旧展示が緻密で完成されすぎた構成であったため，展示の更新性の視点が欠けており，コーナーごとの小規模な展示替えは常時に行われていたものの，観覧者に新鮮な印象を与えることができなかった（二階堂・西口・井上　2008：11–14）。改修にあたって，近現代展示室には時代や内容に幅をもたせた展示テーマを設定し，民俗展示室には 2 年に 1 度の頻度で展示室全体を更新する計画を立て，可動式の展示ステージや更新可能な映像解説システムを導入した（二階堂・西口・井上　2008）。また，兵庫県立歴史博物館は第 1 回の展示改修において，包括的で柔軟性のあるシナリオを作成し，文字パネル・写真パネル・図解などの展示補助資料の入れ替えが容易な設定とした（小栗栖　1996：7–8）。次に，沖縄県立博物館は，自然史・考古・美術工芸・歴史・民俗の 5 つの部門展示で，展示テーマに可変性を持たせ，展示替えの頻度を高める工夫を行った（園原　2008：64–65）。そして，北海道博物館は第 2 回展示改修に際して，展示更新の必要性について，①部分的な改訂が困難である旧展示は観覧者に「いつ来ても同じ」「一度観れば十分」の印象を与えていたこと，②社会情勢の変化や学問の進展による新たな知見，館による研究成果などを展示に反映させにくかったこと，③展示資料の定期的な入れ替えが資料保存面でも有用であることの 3 点にまとめている（堀　2014：26）。新展示の内容構成から展示ケースまで，資料の入れ替えを前提にしたものにし，また，常に変わらないという印象をもたれがちな「常設展示」という呼称を「総合展示」に変化させた（堀 2014：27）。

展示室を新設する例として，三重県総合博物館は常設展示の固定化を避けるため，三重の自然と歴史をテーマとした基本展示に加え，可変性の高い「トピック展示」を導入することで対策を講じた。トピック展示は基本展示と連動し，基本展示を補完する展示として位置づけられ，随時展示替えを行うことで，三重の自然と歴史を多様な視点で紹介するものである（三重県 2008：37）。

(2) 実物資料を重視する傾向

実物資料を展示の中心とする理由について，本稿で調査対象とした博物館の言及を確認すると，①実物資料で展示情報を伝えることが博物館の原点，②ジオラマや模型など展示理解を補助する二次資料が常設展示の固定化をもたらす原因になりうるという問題点が表面化したこ

と，③資料収集や保存科学の進展によって展示できる実物資料が増加したことの３つにまとめることができる。

例えば，福井県立歴史博物館学芸員の笠松雅弘は，「モノを中心とした展示」を改修方針とした理由について述べる際，博物館の歴史展示において，モノを見せるというよりモノを使って歴史の流れを説くことに主眼があったため，モノ自体に意識が向かないという問題が生じる可能性があると述べている（笠松　2000：3）。同様に，秋田博物館は，一定の物語風やストーリーに資料を位置付けることより，来館者が資料そのものにかかわることを重要視し，「資料が来館者に語る，同時に来館者が感動し，無限の創造力を発揮して読み・考え，資料に無限大の広がりをもたせることができる」とう考え方に基づき，可能な限り実物資料を使った（佐々田 2005：4）。

実物資料を活用する具体的な展示手法として，フレキシブルな展示に改修することで実物資料を定期的に更新すること以外，①実物資料の点数を増加し，ジオラマや模型などの補助資料の使用を控えること，②実物資料がより活用できる展示内容や展示構成に変更すること，③実物資料が活用できる展示室を新設することが挙げられる。

実物資料の増加と補助資料の制限に関して，福井県立歴史博物館は「モノ中心の展示」と「感性に訴える展示」の２つの改修方針に基づき，資料が持つ魅力を引き出して観覧者の感性に訴えることを目指し，展示の演出を工夫する一方で，解説などの文字情報を最小限に抑えることとした（瓜生　2003：8）。秋田県立博物館は，ジオラマなどの展示手法が研究が完結したものであるとした印象が刻まれてしまうことがあるため，資料によって得られた情報を来館者に伝えることを主眼とし，人文系展示室において実物資料の点数を 650 点から 3000 点にまで増やし，ジオラマや模型などの補助資料の使用を控えた（庄内・高橋・糸田　2005：19）。ただし，過去の生活空間や生産場面を直観的に体験・再現できるため，複製品や模型などの補助資料を使う場合もあるという。

実物資料がより活用できる展示内容や展示構成に変更する例として，福井県立歴史博物館，埼玉県立歴史と民俗の博物館，高知県立民俗資料館，沖縄県立博物館がある。その中でも，高知県立民俗資料館は，収蔵資料を活用することを改修のコンセプトとし，「資料に即した展示を心がける」考え方を示し，模型を減らしたことで実物資料の点数を大幅に増やした（高知県立歴史民俗資料館　2010：88）。沖縄県立博物館は「物をして語らしめる」という改修原則により，収蔵資料を最大活用することに加え，実物資料から展示のストーリーを構成することとした（園原　2008：67-68）。埼玉県立歴史と民俗の博物館は美術展示室において，重要文化財である美術資料をゆっくり鑑賞できる環境を整備するため，通史のシナリオから離れて美術鑑賞の視点で展示資料を再構成した（二階堂・西口・井上　2008：3）。

実物資料が活用できる展示室を新設することについて，北海道博物館は，開館当初資料収集計画が達せず，空間上の制限もあるため，課題展示を中心的に展開したが，資料に基づくより

多くの歴史的な情報を得たいという観覧者の要望に対応する取り組みとして，第 1 回の展示改修において「資料の地方的な変異や時代的な変化を示すもの」という実物資料を中心とする分類展示を新設し，展示資料数を 3192 点から 5467 点にまで増やした（北海道開拓記念館　1994：52–55）。ただし，第 2 回の展示改修では，狭い通路に展示資料が高密度に並ぶ展示手法が観覧疲れの要因と考え，展示資料数を絞って面積当たりの情報を大幅に減すことを通じて，ゆったりの展示空間へ改修した（堀　2014：26）。群馬県立歴史博物館は，館蔵資料を活用し群馬の特色をアピールするため，考古・歴史・美術工芸・民俗に関するテーマ展示を新設し，重要文化財を含む実物資料を中心に新展示を展開している（黒田ほか　2014：14）。

2.2　調査結果から見た問題点

以上のように，1990 年代以降，都道府県立歴史博物館の常設展示の目的に関して，地域の歴史・文化を理解させるための情報伝達の手段としての認識が続いている一方で，利用者が主体的に活動する場として再構築しようとする動きが見られた。利用者を展示活動の主体と位置付ける博物館も現れた。また，展示内容・展示空間・展示手法の変化により，わかりやすくてフレキシブルな展示への改修には，従来の展示コミュニケーションにおける情報伝達の効率を向上させる意図が読み取れると同時に，利用者が多様的な意識を持つ存在としての認識が深まってきたとも言えよう。特に，選択可能な展示内容と展示動線，利用者自身の生活に関連する展示内容の提示など，利用者の主体的な考えを引き出す展示手法が一般化してきた。これは，利用者を単一で曖昧な集団として考えず，その多様なニーズと主体性に応じる必要性を意識し始めたと解釈できる。これらの変化の傾向は，吉田が指摘している，従来の固定した歴史表象を一方的に生み出す場から展示利用者の自身の理解や地域の歴史と自身の関係を見つめ直す場への転換が一致していると考えられる。また，その転換に効果があると考えられている実物資料を中心とした展示についても，実物資料の点数を増やし，実物資料に即した展示を展開する博物館が見られた。

しかしながら，歴史展示を利用者が主体的に活動する場として再構築する具体な方法としては，兵庫県立博物館の「学びのスペース」と北海道博物館の「交流ゾーン」のような活動空間の設置，三重県総合博物館の「交流展示室」のように県内の個人や団体が展示製作に参加できる企画展示室が挙げられている。これは，常設展示室の外で行われる事業や活動で，常設展示自体の歴史叙述やコミュニケーション構造に直接影響が及んでいるとは言い難い。また，先行研究によれば，展示のコミュニケーション構造を変化させる有効な展示方法として，実物資料を中心とした展示が挙げられている。そして，改修において利用者の主体性を促す方法として，多層な展示内容と選択できる展示動線が広く採用されている。この 3 つの展示手法の効果についても研究する必要があるが，本稿で調査した 11 館の博物館が展示改修の効果を検証するために行った来館者調査を調べたところ，選択できる展示動線に関したデータしか確認できな

かった。実物資料を中心とする展示と，多層な展示内容を提供する展示に対して，文献調査以外の研究方法で，その効果と課題を更に研究する必要があると考えられる。

したがって，次の節ではまず選択できる動線に関した来館者調査の結果を基に，その問題点を整理し，その中に含まれる展示利用者，または展示のコミュニケーション構造に対する博物館の考え方を検討していく。

3．展示動線の問題点から見た博物館の展示利用者に対する考え方

3.1　選択できる展示動線の問題点

本稿の調査対象館のうち，北海道博物館，沖縄県立博物館，群馬県立歴史博物館の 3 館が展示改修の効果を検証するため，展示利用者の利用状況に関する調査を行い，その結果を公開している。

北海道博物館の前身である北海道開拓記念館は 1971 年に開館した，北海道百年記念事業の一環として設置された博物館である。1992 年に第 1 回の展示改修が完成した。アイヌ民族文化研究センターとの統合によって 2015 年に北海道博物館と改称し，リニューアル・オープンした。1992 年の第 1 回の展示改修において，旧展示の重複・交錯しない単一動線を引き続き採用しながら，実物資料や模型などの造型物の増加で若干窮屈な空間に改修した（北海道開拓記念館　1994：18；33）。2015 年の第 2 回の展示改修では，展示利用者が興味のあるテーマから自由な順序で観覧できることを目指し，誘導型の流れを持ちながら自由選択できる動線に変更した（堀　2014：26）。

そして，北海道博物館は 2016 年と 2017 年に 2 回の来館者調査を実施した。調査方法は，来館者の観覧路線を追跡する動向調査と，観覧感想を収集するインタビュー調査を併用して行った。インタビュー調査の項目は，来館者の属性（年齢，居住地，性別など），過去の来館回数，来館動機，職員の対応，料金の妥当性，総合展示の満足度であった。2016 年の調査では 13 組（86 人）の来館者に動向調査を，60 組（177 人）の来館者を対象にインタビュー調査を実施した。2017 年度では，34 人に動向調査を，62 人にインタビュー調査を行った（栗原・田村　2017，栗原・池田・堀　2018）。

北海道博物館の 2016 年の調査の結果によれば，観覧順路に関してはテーマの数字順に観覧する人が多かったことが明らかとなり，総合展示の満足度と展示全体に対する感想については，①展示資料数が少ない，②子どもに難しい，③順路がわかりにくいという意見が多く寄せられた（栗原・田村　2017）。2017 年の調査でも同様な結果が見られた（栗原・池田・堀　2018）。順路がわかりにくいという感想に対して，北海道博物館は「複線型に改修したことによる結果で，改修の意図を来館者に理解されていない状況が読み取れる」と考えている（栗原・池田・堀　2018：216）。そのため，どのテーマからも観覧可能な複線型の動線を確保しつつ，推奨す

る観覧順をサインなどで示す対策を講じる必要があるという改善方向を示している（栗原・池田・堀　2018：216）。

沖縄県立博物館は，2007 年の移転開館までに 5 度の新館建設と 5 回の移転を経験してきたが[8]，常設展示に関する資料は一部しか残されていなかったため，本稿では現存する資料が比較的充実している 2007 年の展示改修を調査対象とした。2007 年の改修にあたって，歴史展示室，自然史展示室，美術工芸室，民俗展示室の 4 つの「分類展示」から構成された旧展示に対して，沖縄の自然・歴史・文化を海洋性と島嶼性という 2 つの側面から総合的に読み解く「総合展示」と，より専門性の高い「部門展示」に改修した。また，総合展示と部門展示は展示内容から展示空間まで有機に連携している。すなわち，総合展示の総覧から部門展示へと利用者を導くことができるとともに，部門展示の専門的な内容を改めて総合展示の中で確認できたり利用者が自ら新たな発見できたりすることができる。さらに，総合展示はオープンで空間全体が見渡せる自由動線をとることができる配置とした。沖縄県立博物館はこの展示構成を「プラザ型常設展示」と呼び，その意図が「各分野を網羅するメイン展示と，そこから枝分かれ式に派生するサブ展示を提供することにより，来館者へ選択的動線を与える」と述べている（園原　2008：64–65；67）。

しかし，開館後利用者が総合展示と部門展示との間を行き来したりするケースや，展示項目を見落とすケースが多く見られた。そこで，沖縄県立博物館は来館者の観覧状況を把握するため，2009 年と 2010 年に 2 回の追跡調査を実施した。調査方法は，利用者が展示室に入ってから出るまでの観覧路線を追跡すると同時に，性別や年齢，観覧項目，観覧項目ごとの滞在時間などを記録するものである（濱口　2010；2011）。

沖縄県立博物館は調査の結果に基づき，総合展示と部門展示の連絡口に構造上の問題があることが，展示利用者が意図通りに観覧していなかったことの原因と考えられている（濱口 2010：109）。また，来館者の平均滞在時間が 52.7 分であった調査結果に対して，「総合展示に関しては動線に従って観覧したほうが学習効果は高いものと考えられるが，入場者にしてみれば，動線を把握したところで時間的に回りきれないという問題がある。そこで，当館の総合展示については，動線を明示することとともに展示項目の選び方を伝える必要があるだろう。仮に 1 展示項目 2.5 分で 50 分間観覧するとすれば，1 回の滞在で観覧できる展示は最大 20 項目ということになる。どの展示をどのような順番で 20 項目観覧するのがよいか，入場者に対しモデルプランを示すことは意味があると思われる」と述べている（濱口　2010：110）。要する

[8] 5 度の新館建設とは，1945 年開館した沖縄陳列館，1946 年に開館した首里市立郷土博物館，1953 年に開館した琉球政府立博物館（那覇市首里当蔵町），1966 年に開館した琉球政府立博物館（那覇市首里大中町に所在し；後に「沖縄県立博物館」と改称），2007 年に開館した沖縄県立博物館・美術館である（園原 2008）。

に，来館者が複雑な展示動線を把握することに時間がかかる現実から，博物館での滞在時間をできるだけ展示観覧に割り当てるためには，動線を明示することとともに，展示項目の選び方やモデルプランを提供する必要があるという考えを示している。

群馬県立歴史博物館は 1979 年開館した歴史博物館で，2011 年に重要文化財の水滴染み事故が発生し公開承認施設としての承認が取り消された。再承認されるため，館の管理運営の見直しと展示改修が実施され，2016 年にリニューアル・オープンした（黒田ほか　2014）。改修後の常設展示に関する来館者の意見を把握するために，2016 年にアンケート調査を実施し，来館者の所属，来館のきっかけ，滞在時間，観覧感想などについて調べた（小池　2017）。調査結果によれば，「見る順がわかりにくい」と「内容が難しい」という質問に対しては，約 25％の人が「はい」と回答したことがわかった（小池　2017：87）。

以上の調査結果をまとめると，展示動線のわかりにくさが一般的な問題となっており，特に元の強制的な動線を選択できるように改修された博物館ではこの問題が顕著であると言えよう。北海道博物館は単一動線から誘導の流れを持つ選択できる動線に変更したが，来館者調査では順路がわかりくにいとの回答が寄せられた。その問題について，北海道博物館は改修の意図が来館者に理解されていなかったことが原因とし，推奨する観覧順をサインで示すような対策が必要と考えられている。沖縄県博物館は，選択できる動線を取ることができる空間配置にしたが，時代順で展示資料を並べる総合展示において観覧動線と無関係に展示項目を回ったり見落としたりする来館者がいたことが調査で明らかになった。それに対して，沖縄県博物館は展示項目の選び方を明示する必要があるとし，モデルプランを示すことが有益と考えられている。

3.2　選択できる展示動線が展示体験に支障をもたらした原因

以上で述べたように，展示利用者の主体性を促す展示手法として導入された選択できる展示動線が，実際展示体験に支障をもたらす結果となった。改修当時に求められた効果と逆の結果が出た理由について，１つは選択できる展示動線がストーリー性の強い都度府県立博物館の常設展示には合わない可能性が高いと考えられる。もう１つの要因は，博物館が展示利用者の観覧習慣や展示利用者のニーズへの理解が不十分であることを示唆している。これらの背後には，展示利用者の主体性がまだ十分に重要視され研究されていないという側面があると言える。

前者について，デビッド・ディーンは展示設計の基本原理を説明する際，利用者を誘導する方法を示唆的誘導方法，非規則的誘導方法，規則的誘導方法の３つに分類することができると述べており，非規則的誘導方法に関しては，来館者が自由に展示資料を観覧できるがストーリーラインに沿った展示にはうまく機能しないため，展示資料を積み重ねて説明するような展示構成に頼ることは避けるべきだと主張している（ディーン　2004：69-71）。一方，本稿の 1.2 で述べたように，1990 年代までの都道府県立歴史博物館は通史展示が最も主流的な展示手法で，

その特徴が地域の歴史をストーリー化し，展示シナリオを作成し，選定した資料を展示シナリオに当てはめることである（村上　1992：63-68）。本稿の調査を通して，テーマ展示や分類展示を新設する博物館が増えてきたが，通史展示に特色が足りないことや展示資料の更新が難しいことが理由として挙げられている[9]。つまり，展示シナリオに資料を当てはめるアプローチは変わっていない。展示動線は展示目的や展示シナリオ，予想される来館者数などに応じて計画する必要があり，非規則的誘導方法である選択できる展示動線は，ストーリー性の強い都道府県立博物館の常設展示にはうまく適さない可能性が高い。

後者について，展示動線のみならず，改修当時の予想と異なる結果が出た改修項目はほかにも存在する。例えば，北海道博物館は小学 4 年生でも理解できるような解説文を作成したが，一部の利用者からはわかりくにいという感想が寄せられた（栗原・田村　2017：125，栗原・池田・堀　2018：216）。埼玉県立歴史と民俗の博物館では，収蔵資料を最大限活用し新鮮感を提供するために展示資料を更新した結果，以前の資料を見たかったとの声があった（井上　2019：54）。全ての来館者を満足させる展示は存在しないとよく言われているが，博物館の入り口でも言える常設展示は，何度も観覧するリピーターから，余暇で博物館に訪れる家族連れまで，幅広い利用者に対応する必要がある。特に，博物館経験の薄い利用者に不快感や不安感を与えないことは，リピーターの育成や利用者層の拡大に重要である。今後は，選択できる展示動線を使用した展示の改善策を研究する必要があると考えられる。

4．今後の課題

本稿では，都道府県立歴史博物館がその展示におけるコミュニケーションの構造，あるいは展示利用者との関係をどのように認識してきたか，そのためにどのような展示手法を導入してきたかを考察した。その結果，1990 年代以降，地域の歴史・文化を理解させるための手段として展示を認識する傾向が続いているが，利用者と交流する場や利用者が主体的に活動する場として再構築しようとする博物館が見られた。また，フレキシブルな展示が改修方針とされること，民衆史・生活史に関した展示内容の増加，選択できる展示内容と展示動線の増加などの変化から，従来の展示コミュニケーションにおける情報伝達の効率が向上すると同時に，利用者が主体的で多様的な意識を持つ存在という認識が深まってきたと考えられる。

しかし，歴史展示を利用者が主体的に活動する場として再構築する方法としては，主に常設

[9] 本稿の調査を通じて，2000 年以降，開館当初通史展示を導入した博物館では，従来の通史展示を継承しつつも，テーマ展示や分類展示を新設する傾向が確認された。高知県立民俗資料館，北海道博物館の第 1 回と第 2 回の改修，三重県総合博物館，石川県立歴史博物館，群馬県立歴史博物館がこれに該当する。その主な理由として，通史展示には特色やインパクトが足りないこと，展示資料の更新が困難であることが挙げられている。

展示室外で行われていることが確認できた。そのため，常設展示自体の歴史叙述やコミュニケーション構造に影響を与えているとは言い難い。また，実物資料を中心とする展示や多層な展示情報を提供する展示のような，利用者の主体性を促すことに有効と考えられている展示については，その具体的な効果に関する研究が不足していることがわかった。さらに，選択できる展示動線を使用した展示において，難しい動線が利用者の展示体験に支障をきたしたことが明らかになった。それは，利用者の主体性がまだ十分に重要視され研究されていないことを示唆していると考えられる。今後，実物資料を中心とする展示と，選択できる展示内容と展示動線を使用する展示に対して，その効果と改善策に焦点を当てた研究が必要であると考えられる。

（ぎ　ぶんくん・博物館学研究室）

参考文献

秋田県立博物館　2017『秋田県立博物館年報平成 29 年度』

阿部裕紀子・船木信一・渡部均　2005「リニューアルに伴う展示構成　Ⅰ．自然展示室」秋田県立博物館『秋田県立博物館研究報告』(30)，pp.5-18

石川県立歴史博物館　2017「歴史博物館リニューアル基本構想」石川県立歴史博物館『石川県立歴史博物館年報　第 17 号　平成 25・26 年度版』pp.43-60

井上かおり　2019「近現代展示室の現状と課題 ── リニューアル 10 年後の検討にかえて ──」埼玉県立歴史と民俗の博物館『埼玉県立歴史と民俗の博物館紀要第 13 号』pp.46-56

伊藤寿朗　1986「第 6 章　地域博物館論 ── 現代博物館の課題と展望」長浜功編『現代社会教育の課題と展望』明石書店

伊藤寿朗　1990「地域博物館の思考」校倉書房『歴史評論』(483)，pp.2-19

瓜生由起　2003「福井県立博物館のリニューアル～福井県立博物館から福井県立歴史博物館～」日本博物館協会『博物館研究』38(7)，pp.8-9

沖縄県立博物館・美術館　2008『沖縄県立博物館・美術館年報　No.1』

沖縄県立博物館・美術館　2018『沖縄県立博物館・美術館年報 No.11』

小栗栖健治　1996「兵庫県立歴史博物館におけるリニューアルの理念と実践」日本博物館協会『博物館研究』31(7)，pp.4-10

神戸佳文　2009「兵庫県立歴史博物館のリニューアルについて」神戸史学会『歴史と神戸』48(2)，pp.13-22

笠松雅弘　2000「新しい地域博物館をめざして～歴史博物館へのリニューアル構想～」福井県立博物館『ふくいミュージアム』no.38，pp.2-4

倉田公裕・矢島國雄　1997『新編博物館学』東京堂出版

黒田日出男・岡部清・小池浩平・簗瀬太輔・中山剛志　2014「群馬県立歴史博物館改修工事に関する取り組み ── 使命書の策定と展示の基本方針 ──」群馬県立歴史博物館『群馬県立歴史博物館紀要』pp.1-73

栗原憲一・池田貴夫・堀繁久　2018「来館者調査からみる北海道博物館の総合展示室およびはっけん広場の現状と課題」北海道博物館編『北海道博物館研究紀要』vol.3，pp.201-218

栗原憲一・田村雅史　2017「博物館活動報告　2016 年度博物館実習において実施した来場者調査について」北海道博物館編『北海道博物館研究紀要』vol.2，pp.121–132

高知県立歴史民俗資料館　2010「改修工事」高知県立歴史民俗資料館『高知県立歴史民俗資料館年報　平成 21 年度』pp.85–96

小池浩平　2017「群馬県立歴史博物館改修工事に関する取り組み 3 ── 展示リニューアルとその課題 ──」群馬県立歴史博物館『群馬県立歴史博物館紀要　第 38 号』pp.59–90

小島道裕　2003「報告Ⅳ　歴史展示をつくるとは ── 歴博総合展示を手がかりに」国立歴史民俗博物館編；久留島浩ほか著『歴史展示とは何か：歴史系博物館の現在・未来』アム・プロモーション

小島道裕　2008「歴史展示における模型の意味と活用」国立歴史民俗博物館『国立歴史民俗博物館研究報告』vol.140，pp.201–211

佐々木朝登　1976「展示・その計画を中心として（秋田県立博物館特集）」日本博物館協会『博物館研究』11(5)，pp.6–42

佐々田亨三　2005「リニューアル・オープンに際して」秋田県立博物館『秋田県立博物館研究報告』(30)，pp.1–4

庄内昭男・高橋正・糸田和樹　2005「リニューアルに伴う展示構成　Ⅱ．人文展示室」秋田県立博物館『秋田県立博物館研究報告』(30)，pp.19–36

園原謙　2008「博物館づくり ── 沖縄県立博物館新館常設展示の場合 ──」縄県立博物館・美術館『沖縄県立博物館・美術館紀要　第 1 号別刷』pp.59–79

高橋裕　2004「日本史学における歴史表象学の課題」日本展示学会『展示学』(37)，pp.2–13

デビッド・ディーン著　山地秀俊・山地有喜子訳　2004『美術館・博物館の展示：理論から実践まで』丸善

二階堂実・西口由子・井上かおり　2008「常設展示改修事業および「ゆめ・体験ひろば」設置事業の記録」埼玉県立歴史と民俗の博物館『埼玉県立歴史と民俗の博物館紀要第 2 号』pp.1–36

日本博物館協会　1988『全国博物館総覧』ぎょうせい

橋本裕之　1998「物質文化の劇場：博物館におけるインターラクティヴ・ミスコミュニケーション」日本文化人類学会『民族學研究』62(4)，pp.537–562

兵庫県立歴史博物館　1992『兵庫県立歴史博物館紀要　塵界　第 5 号』兵庫県立歴史博物館

兵庫県立歴史博物館　2010『兵庫県立歴史博物館館報　平成 19 年度・平成 20 年度』兵庫県立歴史博物館

天野秀昭　2011「三重の新県立博物館整備について ── ともに考え，活動し，成長する博物館をめざして」日本博物館協会『博物館研究』46(3)，pp.24–27

船木信一・鈴木秀一　2005「リニューアルに伴う展示構成　Ⅳ．わくわくたんけん室」秋田県立博物館『秋田県立博物館研究報告』(30)，pp.47–56

濱口寿夫　2010「博物館常設展示における入場者の観覧行動」沖縄県立博物館・美術館博物館編『沖縄県立博物館・美術館博物館紀要』vol.3，pp.101–110

濱口寿夫　2011「博物館常設展示における展示項目は入場者に見られているか？」沖縄県立博物館・美術館博物館編『沖縄県立博物館・美術館博物館紀要』vol.4，pp.101–114

北海道　2010『北海道博物館基本計画』
https://www.pref.hokkaido.lg.jp/ks/bns/a0001/b0007　最終閲覧：2023 年 8 月 15 日

北海道開拓記念館　1994『北海道開拓記念館常設展示改訂事業報告』

北海道博物館　2018『北海道博物館要覧』
http://www.hm.pref.hokkaido.lg.jp/study/publication　最終閲覧：2023 年 8 月 15 日
堀繁久　2014「北海道博物館，2015 年春オープン！」日本博物館協会『博物館研究』49(9)，pp.25-28
増田亜樹・碓田智子・谷直樹　2011「公立歴史博物館の常設展示の類型とその変遷に関する研究」日本建築学会『日本建築日本建築学会計画系論文集』vol.76（667），pp.1745-1751
三重県　2008『新県立博物館基本計画』
https://www.bunka.pref.mie.lg.jp/MieMu/shinhaku　最終閲覧：2023 年 8 月 15 日
三重県総合博物館　2016『三重県総合博物館年報通巻 1 号』
村上義彦　1992『博物館の歴史展示の実際』雄山閣出版
湯浅隆　2018「歴史学の動向と歴史博物館の展示」東京女子大学『教職・学芸員課程研究』編集委員会『教職・学芸員課程研究』vol.1，pp.71-83
吉田憲司　2011『博物館概論』放送大学教育振興会